

中級日本語学習者の文章理解に見られる読み誤りの諸相 —ロシア語・ウクライナ語母語話者を対象に—

POKROVSKA OLGA

ポクロフスカ、オーリガ

LD112003

要旨

1. 研究の前提と目的

本研究は、ロシア語・ウクライナ語母語話者中級日本語学習者の文章理解における読み誤りを質的に分析し、考察を行ったものである。

読み誤りは第二言語・外国語教育現場において日ごろ見られるものだが、学習者がなぜどのように理解したのか、教師が戸惑うことがしばしばある。特に、教師が目標言語の母語話者であり、学習者と母語をともにしない場合、読み誤りの原因を特定し、学習者の読解を助けることが容易ではない。

読み誤りは、人工的に取得し、独立して取り出すことが困難であるなどといった性質上、今までは体系的に研究されてこなかった。ただし、文章理解の研究では読み誤りへの言及があり、読み誤りはボトムアップ処理とトップダウン処理のバランスが崩れるときに生じると言える。母語話者の場合は背景知識や信念といったトップダウン的要素の影響が強いのに対し、学習者や読み手として未熟な母語話者は音韻符号化や単語認知などのボトムアップ的処理が問題となりやすい。そのため、学習者の母語とズレがある言語項目など、読み誤りにつながるものを記述していく必要がある。特に目標言語の知識・読解能力ともに不十分な中級学習者において、読み誤りが多く生じ、読解を妨げることで読解能力の育成に支障を来すと考えられる。

そこで本研究では、ウクライナで日本語を学ぶロシア語・ウクライナ語を母語とした中級学習者を対象に、読み誤りのきっかけとなりやすい要素を明らかにし、読み誤りが生じる過程を可視化することを目的とした。以下では、そのために採った研究方法と、研究の成果をまとめる。

2. 研究方法

本研究は学習者を対象とした読解調査と、日本語母語話者を対象とした査定調査を行った。

学習者を対象とした調査の対象者は、日本語を主専攻として学ぶウクライナ人大学生（ロシア語・ウクライナ語母語話者）12名、日本滞在歴がなく、ウクライナの日本語教育現場では中級に当たる3年生と4年生であった。ウクライナの学習者を対象にした背景と意義については、第4章で詳細に述べた。

手続きとしては、対象者に、意見文と物語文の2種類を、課題文1と課題文2として読ませ、発話思考法を伴う母語への「口頭翻訳」をさせた。読み終わった後に、読んだ文章の内容を母語で「筆記再生」させ、最後に、口頭翻訳のデータを聞かせながらフォローアップ「イ

インタビュー」を行った。対象者の相対的な日本語能力は、特に文法能力と聴解能力との相関が強いとされている SPOT テスト（筑波大学の留学生センター開発）で計った。本論では、学習者の読みの過程を明らかにするものとして「口頭翻訳」、それを補うものとして「インタビュー」のデータを中心に分析を行い、必要に応じて筆記再生のデータも取り上げた。

母語話者を対象とした調査では、6名の日本語母語話者に、学習者の筆記再生の和訳を10点満点で評価してもらい、評価の根拠についてインタビューを行った。母語話者による評価データは補助的に使用した。

3. 論文の構成と成果

学習者の読み誤りにはボトムアップ的要素の役割が大きいことから、データの分析と考察は第5章から第9章にかけて、「文字列」「語」「文法」「談話」の4レベルに分けて行った。各章では、そのレベルに関する先行研究の見解を整理し、実際のデータにおいて見られた特徴的な現象を例に分析を行った。第5章と第6章では文字列処理における文字認識と分節の問題、第7章では語彙レベル、第8章では文法レベル、第9章では談話レベルの読み誤りについて論じた。なお、特定の要素の読み誤りに関する第7章～第9章では、その要素を含み特徴的な読み誤りが見られた課題文1のみのデータを扱った。

第5章 文字認識レベルにおける読み誤り：語彙活性化のきっかけとカタカナの問題

第5章では、文字の読み誤りを扱った。「正直→正しぎ」「モノ→メモ」というように、対象者の音読と課題文の文字情報と異なる部分を抽出し、文字認識と単語認知における読み誤りを分析した。その結果、中級段階においても、かなの処理に問題が見られることがわかった。より日本語能力の低い学習者が未知語に遭遇した場合、「ぬ→め」「こ→い」などと、類似したひらがなを読み間違えることがある。カタカナ語においては、日本語能力に関係なく文字認識の訓練、「シェ」などのカタカナ特有の表記法、そして語彙としてのカタカナ語の知識が不足している。単語単位の読み誤りからは、「ゆきえ→行方」「していないから→していながら」など、類似した自立語や機能語が活性化されることが分かった。

第6章 文字列処理における誤り：分節上の課題

文字列を適切に分節しながら読む能力は、読解全体の流暢さに関わる。分かち書きをしない日本語では、母語話者は漢字を目で追って読む傾向があり、表記の種類がある程度助けとなるが、語彙知識が不十分な学習者にとっては文字列の分節が困難である。

対象者が日本語を読み上げるときのポーズの置かれ方、語の切り出し方、そして翻訳における意味単位の捉え方に基づき、文字列の区切り方が不適切だった箇所を抽出した。その結果、対象者らは意味の抽出に集中するあまり、「抜き出す」の代わりに「抜き」や「抜き出」というように付属語を切り捨てて捉える、もしくは「ひと昔前→人々は昔」「みずから→～から」というように、造語パターンや文法的構造を誤って捉えることから、文字列の誤った分節をしていた。

一方で、分節に成功した対象者は、より豊富な言語知識を生かし、既知要素を効率よく切

り捨てることで、未知要素の境目を正確に捉えていた。このことから、語彙学習などの負担をかけずに学習者の分節能力を高めるために、造語パターンを意識した語彙導入や、理解を目指さない文字列分節化の活動を取り入れることが有効ではないかと考えられる。

第7章 語彙レベルにおける読み誤り： キーワードの読み誤りが文章理解に及ぼす影響

語彙レベルの読み誤りには、語そのものの読み誤りと、語の読み誤りから派生する読み誤りとがある。前者には多義語の意味選択失敗や意味推論の失敗などが見られる一方で、後者はほとんど研究されていない。そこで、文章全体の理解に影響を与える「キーワードの読み誤り」に注目した。

課題文1には、「モノ」というキーワードが8回繰り返しているが、これが「和語でありながらカタカナで表記」されていることから「メモ」と認識されやすく、また「メモ」が「直近の文脈に馴染みやすかった」ことから、誤解に気づきにくかった。対象者の中にはさらに、「メモ」を「メモリ」、つまり「記憶」として読み誤った者がいた。その読みの過程を詳細に分析したところ、キーワードと共起する他の単語の意味を「メモリ」に合うように変える、それが成り立たない場合翻訳を放棄する、文章全体のテーマを誤解して誤った文脈を作り上げる、誤った文脈に合わせて誤った背景知識を想起させるなどの行為により、文章全体の理解が大きく崩れる様子が観察された。カタカナ語の読みにおいて英語の知識が負に働くことがあり、それがキーワードの場合は文章全体に影響が及ぶ。

第8章 文法レベルにおける読み誤り： 「語り手」を示す一人称の省略復元プロセス

文法レベルにおける読み誤りにつながるのは、文構造の不適切な解釈、文法項目の読み飛ばし、機能語の混乱などである。母語に関わらず多くの学習者にとって、主語のない文が読み誤りの対象となりやすい。それは、動作主が想定されていない文で動作主が挿入される、そして実際に一人称省略が起きている文が一般論や総称的省略として捉えられる、という形で現れている。この読み誤りは日本語母語話者にとって盲点となりやすい。

課題文1では、著者が自分の生活を例にして語っている部分があったが、8回のうち7回は「わたし」が省略されていた。特に先行詞が直前の文脈にない5～8回目において、より日本語能力の低い学習者は、語り手ではない「一般者」を動作主として同定していた。その際には、一人称省略が起きやすい構造に関する明示的知識があっても、「これは個人の話ではなくアドバイスである」などといった文章に対するイメージが優先され、一人称復元に失敗しやすかった。一方で、動作主が想定されていない条件文などで語り手が動作主として挿入されることがあり、「主語のない文を見たら一人称省略だと思え」という知識が負に働いていることもある。

日本語母語話者にこれについて意見を訪ねたところ、問題視する者もいれば気にしない者もあり、母語話者教員にとってこの読み誤りは見逃されやすいと考えられる。

第9章 談話のレベルにおける読み誤り： 接続表現が表す論理関係を読み取る際の問題

談話レベルにおいて、文章全体の意味を理解するのに、文章の構造を意識するなど、文の範囲を超えて情報を統合させるスキルが必要である。その際には接続表現が重要である。

しかし、接続表現の読み方に注目して対象者の読みを分析したところ、文間関係の理解においては、接続表現よりも、前件と後件の解釈を基にした推論に頼る傾向があった。接続表現そのものの理解においては、その意味が周りの文脈に合わせて「ぶれやすい」ことが分かった。並列関係を表し、ソ系指示詞を含む「それで」「そこで」などがもっともぶれやすく、学習者の母語において相当訳語がある「たとえば」や「特に」はもっともぶれにくかった。また、前後の内容が複雑であり、接続表現のかかりうける「機能領域」がはっきりしない場合、読みから欠落し無視されやすかった。

なお、接続表現の処理の困難さに関わらず、未習のものについても意味確認を行う対象者は少なく（最大は「なぜなら」で12名中3名）、文間関係の理解においては接続表現よりも後件の内容から推論することが多いようである。

処理における優先順位の問題

以上の5章の分析からは、「処理における優先順位の問題」が浮き彫りになった。

学習者が要素に重みを置く順位は、①漢字を含む語、②カタカナ語、③ひらがな語（実質語・機能語含む）である。未知語に遭遇した場合、漢字を含む語の意味確認は頻繁に行われるのに対し、カタカナ語は「英語の知識でなんとかなるもの」、接続表現や副詞などのひらがな語は「自力でなんとかするもの」、または「読み飛ばすもの」として認識されている。特にひらがな語は、理解に支障をきたしていると対象者がわかっているにもかかわらず意味確認を行わないことが多かった。その結果、カタカナ語とひらがな語の意味確認がおろそかになり、読み誤りにつながっていた。

4. 今後の課題と本研究の限界

本研究には、同じデータから更なる分析が可能な「ローカルな課題」と、研究方法の改善や新たな調査を要する「グローバルな課題」とがある。

ローカルな課題では、①理解に関わる諸現象（第7章～第9章）において保留となった課題文2の分析、②特定の項目に限定しない、読み誤りされやすい言語項目の徹底的な記述、③「正しい読み」との比較、そして④母語話者評価者のインタビューデータの分析である。

グローバルな課題としては、①サンプル数を増やし、②他言語母語話者と日本語母語話者との比較を行い、③調査において対象者にインターネットなどのリソースを自由に使用させ、そして④特定の読み誤りを分析する上で、他の読み誤りの影響を最低限に抑える研究方法の開発が求められる。